

明治の文学の開拓者

——坪内逍遙——

内田魯庵

青空文庫

坪内君の功労は誰でも知ってる。何も特にいわんでも解ってる。明治の文学の最も偉大なる開拓者だといえればそれで済む。福地桜痴ふくちおうち、末松謙澄すえまつけんちようなどという人も創業時代の開拓者であるが、これらは鋏を入れてホジクリ返したただけで、真に力作して人跡未踏の処女地を立派な沃野長田たらしめたのは坪内君である。

ありてい有体ありていにいうと、坪内君の最初の作『書生氣質』は傑作でも何でもない。愚作であると公言しても坪内君は決して腹を立てまい。私が今いうと生意氣らしいが、私は児供こどもの時からヘタヤタラに小説を読んでいた。西洋の小説もその頃リットンの『ユーゼニ・アラム』を判分教師に教わり教わりながらであるが読んでいた。(これが私の西洋の小説を読んだ初めで。)であるから貸本屋の常得意の隠居さんや髪結かみゆいどこ床の職人や世間普通の小説読者よりは広く読んでいたし、幾分かは眼も肥えていた。であるから坪内君の『書生氣質』を讀んでも一向いっこう驚かず、平たくいうと、文学士なんでもものは小説を書かせたら駄目なものだと思っていた。格別気にも留めずにいた。その時分私の親類の或るものが『書生氣質』を揃えて買って置きたいからって私に買ってくれといった時、私はあんなツマラヌものはおよしなさい、アレよりは円朝の『牡丹燈籠』の方が面白いからといって代りに『牡丹燈

籠』を買ってやった事がある。『牡丹燈籠』は『書生気質』の終結した時より較ややくれて南伝馬町の稗史出版社（今の吉川弘文館の横町）から若林珪蔵氏の速記したのを出版したので、講談速記物の一番初めのものである。私は真実の口話の速記を文章としても面白く思つて『牡丹燈籠』を愛読していた。『書生気質』や『妹と背鏡』は明治かぶれのした下手な春しゅん水すいぐらいにしか思わなかつた。

私のような何にも知らないものさえ実はこの位にしか思わなかつたのだから、その当時にトルストイをもガンチャロフをもドストエフスキーをも読んでいた故長谷川二葉亭が下らぬものだと思つたのは無理もない、小説に関する真実の先覚者は坪内君よりは二葉亭であるといつても坪内君は決して異論なからうと信ずる。私は公平無偏見なる坪内君であるが故に少しも憚はげからずに直言する。

けれども『書生気質』や『妹と背鏡』に堂々と署名した「文学士春の屋おぼろ」の名がどれほど世の中に対して威力があつたか知れぬ。当時の文学士は今の文学博士よりは十層倍の権威があつたものだ。その重々しい文学士が下等新聞記者の片手間仕事になつていた小説——その時分は全く戯作だつた——その戯作を堂々と署名して打つて出たという事は実に青天の霹靂かといおう乎、空くう谷こくの登き音おんといおう乎、著るしく世間を驚かしたものの

だ。

自分の事を言うのは笑止しいが、私は児供の時から余りアンビションというものがなかった。この点からいうとよほど馬鹿だった。それ故大学を卒業して学士になろうなどという考は微塵もなく、学士というものがどれほどエライものであるか何かそんな事は一向念頭になかった。であるから『書生気質』や『妹と背鏡』を見て、文学士などというものは小説が下手なものだと思つたばかりであるが、親だとか伯父だとかが私が小説に耽溺するのを頻りに喧ましくいつて「下らぬ戯作などを読む馬鹿があるか」と叱られるたんびには坪内君を引合に出しては「文学士でさえ小説を書く、戯作戯作と軽蔑するようなものではない」というと、親や伯父は文学士をエライものだと思つてゐるから聊かヘコタレの気味であつた。

こんなわけで「文学士春の屋おぼろ」というものは非常な権威があつた。かつ坪内君は同時に小説論をしばしば書いた。後の『小説神髓』はこれを秩序的に纏めたものだが、この評論は確かに『書生気質』などよりは重かつた。世間を敬服させた。これも私は丁度同時にバージーンの修辞学を或る外国人から授かつて、始終講義を聞いていた故、確かにその一部をバージーンから得たらしき（坪内君には聞いて見ないが、）『小説神髓』を余り

に驚かなかつたが、シカシ例証として日本の作物を挙げて論じられた処は面白くも読みか
つまたお庇かげで蒙ひらを啓いた処もある。二葉亭はこの『小説神髓』に不審紙を貼りつけて坪内
君に面会し、盛んに論難してベリンスキーを揮ふりまわ廻したものだ、私は日本の小説こそ京
伝の洒落本しゃれほんや黄表紙、八文字屋ものの二ツ三ツぐらい読んでいたけれど、西洋のものは
当時の繙訳書ほんやくしょ以外には今いったりツトンの『ユーゼニ・アラム』だけしか知らず、小説
論如きは皆目解らなかつたから、『書生気質』こそ下らぬものだと思つていたが『小説神
髓』には大分お庇を蒙つた。

その後私は一年ばかり専門学校に籍を置いた事がある。坪内君、大阪朝日の土屋君、独ド
逸イツのドクトルになつて渡辺龍聖君などと同時代だった。尤も拠もつとよんどころない理由で籍を置いた
ので、専門学校の科程を履修しようというツモリは初めからなかつたのだから、籍を置い
たというだけで、殆ほとんど出席しなかつたが、坪内君の講義はその時分評判であつたゆえ数
回聞いた事がある。であるから坪内君は私の先生ではあるが、多勢の聴講者の中に交つて
たツた二、三回しか講義を聞いただけの頗すこぶる薄い関係であるし、平生先生呼ばわりをされ
る事が嫌いな人だから一度も先生といった事はないけれども、たしかに明治二十二年頃の
初対面以後今日まで始終往来して少からずお世話になつてゐる。実に親切な人だ。親身にな

って世話をしてくれる。私はお世話になったが、お世話を甘受しなかった事もあるから、事に由ると世話甲斐のない男だと思われてるかも知れぬがシカシ心中では常にお世話になった事を感謝しておる。故二葉亭に關する坪内君の厚情は実に言舌を以て尽しがたいほどで、私如きは二葉亭とは最も親密に交際して精神上には非常に誘掖されてるにも関わらず、二葉亭に対していまだかつて何も酬^{むく}うておらぬ。坪内君に対して実に恥入る。かつまた二葉亭に対して彼ほど厚情を寄せられるのを深く感謝しておる。

話は見当違いに飛んで終つたが、坪内君の世間に及ぼした勢力は非常なもので、いやしくも文芸に興味を持つた当時の青年は、「文学士春の屋おぼろ」の名に奮起して身を文壇に投ずる志を立てた。例えば二葉亭の如き当時の造詣はむしろ坪内君を凌ぐに足るほどであつたが、ツマリ「文学士春の屋おぼろ」のために崛起^{くつき}したので、坪内君莫^なかつせばあるいは小説を書く気には一生ならなかつたかも知れぬ。また『浮雲』の如き世論『書生氣質』以上であるが、坪内君の合著の名でなかつたなら出版する事は出来なかつたのだ、出版しても恐らくアレほどに評判されなかつたろう。

尾崎、山田、石橋の三氏が中心となつて組織した硯友社^{けんゆうしゃ}も無論「文学士春の屋おぼろ」の名声に動かされて勃興したので、坪内君がなかつたならただの新聞の投書ぐらいで満足

しておつたろう。紅葉の如きは二人とない大才子であるが、坪内君その前に出でて名を成したがために文学上のアンビションを焔もやしたのでさもなければやはり世間並の職業に従事してシヤレに戯文を書く位で終つたろう。従来片商売として扱われ、作者自身さえ戯作として卑下していた小説戯曲などが文明に貢献する大なる精神的事業である事を社会に認めしめたのは全く坪内君の功勞である。

坪内君はイツでも新らしい道を開く。劇の如きも今日でこそ猫も杓子も書く、生れて以來まだ一度も芝居の立見さえした事のない連中が一と幕物を書いている。児供のカタゴトじみた文句を聯ならべて辻つじ褻つしま合わぬものをさえ気分劇などと称して新らしがっている事の出来る誠に結構な時勢である。が、坪内君が『桐一葉』を書いた時は団十郎が羅馬法王ローマで、桜お痴居士うちが大宰相で、黙阿弥劇もくあみが憲法となつてゐる大專制国であつた。この間に立つて論難批評したり新脚本を書いたりするはルーテルが法王の御教書を焼くと同一の勇氣を要する。『桐一葉』は勿もちろん論『書生氣質』のようなものではない。中々面白い。花見の夢の場、奴の槍踊の処は坪内君でなくてアレほど面白く書くものは外にあるまい。が、今日坪内君はこれを傑作とも思ふまいし、また坪内君の劇における功勞は何百年來封鎖して余人の近づくと許さなかつたランド・オブ・シバイの関門を開いたのであつて『桐一葉』の価値を論

ずるが如きはそもそも末である。

早稲田における坪内君の功蹟は、左も右とくも文壇に早稲田派なるものがあつて、相應に文学に貢献もすれば勢力も持つてゐる一事が明白に証明しておる。これ以上一語を加うる必要がない。早稲田大学は本もとと高田、天野、坪内のトライアンビレートもともを以て成立した。三君各々おのおの相譲らざる功蹟がある。シカシ世間が早稲田を認めるのは、政治科及び法律科が沢山の新聞記者や代議士や実業家を輩出したにも関らず、政治科でも法律科でもなくて文学科である。何といつても日本の最高学府たる帝国大学に対しては民間私学は顔色なき中に優に大学と拮抗して覇を立つるに足るは実業における三田と文学における早稲田とで、この早稲田の文学をしてシカク威力あらしめたるは一に坪内君の功蹟である。文部大臣が三君の中先ず第一に坪内君を擢ぬんで報ゆるに博士の学位を以てしたのは推薦者たる大学もまた坪内君の功蹟を認めざるを得なかつたのであろう。下らぬ比較をするようだが、この三君を維新の三傑に比べたなら高田君は大久保甲東で、天野君は木戸である。大西郷の役廻りはドウシテモ坪内君に向けなければならぬ。坪内君がいなかつたら早稲田は決して今日の隆盛を見なかつたであらう。

文芸協会の成功は更に一層明白な事実である。腹藏なくいえば文芸協会の芝居がそれほ

ど立派なものだとは思わぬ。少くも見物してそれほど面白いとも思わぬ。沙翁劇にしろイブセンにしろ、本を読んだ時に与えられた以上の印象を受けたという事は出来ぬ。私は坪内君が諛辞を好む人でない事を知つてから少しも憚らずに直言する。シカシ世間に与えた感動は非常なもので、大多数は尽くヒブノタイズされてしまつて、紅隈の団十郎が大眼玉を剥いたのでなければ承知出来ぬ連中までが「チンプンカンで面白くねエ、馬鹿にしてやがる」といいながらも一種の暗示を与えられてこれを迎えずにはいられなくなつてしまつた。坪内君の威力はエライものだ。これが時勢であらうけれども、この時代の汐先きを早くも看取して、西へ東へと文壇を指導して徐ろに彼岸に達せしめる坪内君の力量、この力量に伴う努力、この努力が産み出す功労の大なるは誰が何といつても認めなければならぬ。

近来はアイコノクラストが到る処に跋扈しておるから、先輩たる坪内君に対して公然明言するものはあるまいが、内々では坪内君の文学は自分等とは交渉しないナドトいつてるものもあるかも知れぬが、坪内君が新しい文学の道を開いてくれなかつたなら今日の文学はこれほどまでに進歩しなかつたかも知れぬ、諸君のようなアイコノクラストが沢山生じたのは即ち飛りも直さず坪内君の功労である。坪内君は明治の文学の大いなるエポック

・メーカーである。

青空文庫情報

底本：「新編 思い出す人々」岩波文庫、岩波書店

1994（平成6）年2月16日第1刷発行

2008（平成20）年7月10日第3刷

底本の親本：「新潮」

1912（明治45）年1月初版発行

初出：「新潮」

1912（明治45）年1月号

入力：川山隆

校正：門田裕志

2011年5月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

明治の文学の開拓者

——坪内逍遙——

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 内田魯庵

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>